

## 卒業生代表挨拶

ただいまご紹介にあずかりました、平田悠仁と申します。卒業生を代表いたしまして、ご挨拶申し上げます。

はじめに、「どうせ高校の卒業式があるのだから来なくてもいいよ」と言われながらも、本日ご列席賜りました保護者の皆様、そして組主任をはじめとする先生方に、卒業生を代表して、心より御礼申し上げます。

私には、この大講堂から感謝を伝えたい人がもう一人います。約百年前、この武蔵を卒業した私の曾祖父です。曾孫である私がこの学び舎を志すきっかけをくれたのは、紛れもなく彼の存在でした。

もっとも、当の本人はといえば、課題提出はいつも締め切り一分前。タイムマネジメントが不得手な出来の悪い生徒です。このような生徒が皆様の前でご挨拶を申し上げてよいのか、はなはだ疑問です。しかし、ギリギリまで粘って、武蔵のリソースをフル活用して、少しだけ親孝行をしてきたつもりです。そんな私の話に、しばしお付き合ってください。



*If you don't have any shadows, you are not standing in the light.*

これはアメリカの歌手、レディー・ガガが、彼女が人生で最も感銘を受けたというアドバイスの一節です。「影がないということとは、光の中に立っていないということだ」——私はこの言葉を、この三年間、自分自身に重ねて考えてきました。

まず、私の「影」についてお話しさせてください。武蔵に入学してからの人間関係については、思うようにいかないこと、すなわち「影」が少なからずありました。伝えたいことをうまく言葉にできないもどかしさ、すれ違い、自分の不甲斐なさを痛感する場面。そのたびに、自分はこの場所に本当に馴染んでいるのだろうか、と、自問してきました。

そして、将来への不安という「影」にさいなまれる夜もありました。「自分は何をすべきか。」「このままの自分でいいのか。」「周り比べて、自分は劣っているのではないか。」「——そうした答えの出ない問いを抱え、気がつけば深夜二時、三時になっていた、そんな夜が何度もありました。布団の中で天井を見つめながら不甲斐なさと向き合った時間は、今振り返れば、決して無駄ではなかったと信じています。

そして、最も深い「影」として、自分の脳裏に焼き付いているのが、フルートのコンクールでの挫折です。長い時間をかけて準備し、全力を尽くした舞台でしたが、数点差で全国大会への出場

を逃しました。たった数点、されど数点。あの瞬間の悔しさと虚しさは、今でも胸を締め付けます。



しかし、「影がある」ということは「光の中にいる」ということとです。あの挫折があったからこそ、私は音楽と真剣に向き合えました。勉強の壁があったからこそ、粘り強さを身につけることができました。そして、将来への問いを抱え続けたからこそ、自分の軸を少しずつ探し始めることができたのです。影とは暗闇ではなく、光がそこにさしていることの証明なのだと思います。

この三年間で出逢った「光」とは、先輩方、後輩を含めた親友たちの存在です。深夜まで電話を続けながら他愛もない話をした夜、一緒に出かけて笑い合った時間——そうした何気ない日々の積み重ねが、今の私を支えています。あの時間こそが、かけがえない特別な「光」でした。

また、武蔵の行事も、私にとって大切な思い出です。私はどちらかといえば参加者としてではなく、運営側として行事に関わることが多い生徒でした。たとえば強歩大会では、皆さんが二十五キロを歩いているその裏で、不正対策の見回りのために、自転車で百二十五キロを走りました。百二十五キロと言われても、想像が付きませんが、東京から熱海くらいの距離だそうです。もちろん、私は温泉に向かっていたわけではなく、強歩大会のコースを

ひたすら往復していました。正直に言えば、体力的には決して楽ではありませんでした。しかし、朝早くから準備をし、仲間と連携しながら行事を支えていく時間は、とても充実したものでした。表に立つ人だけではなく、裏で支える人がいてこそ、学校の行事は成り立っています。そういったことを実感できたことも、この三年間の大きな経験でした。

私は新しいことにチャレンジすることに躊躇してしまうタイプです。だからこそ、旺盛な探究心を原動力に、未知の領域へも迷わず挑戦する武蔵生の姿を、いつもまぶしく、うらやましく、そして心から憧れをもって見つめてきました。

きっとこれからも、親友との時間は大切な「光」であり続けるだろうと思います。禅の言葉に「我逢人（がほうじん）」という言葉があります。読み下すと、

「我、人と逢うなり」

となります。これは、曹洞宗の開祖・道元の言葉です。「我」「逢」「人」の三文字は、人と人との出逢いの尊さを表しています。道元は、若き日に師を求めて中国へ渡りました。幾多の困難を越え、ようやく念願の師と出逢ったとき、こう記しています。

「まのあたり（先）師をみる、これ人に逢うなり」

私の武蔵中学でのかけがえのない皆さんとの出逢いや交流は、この道元の言葉通りの歓びよろこびを与えてくれる「光」に他ありません。



ここで一つ、百三期生の皆と共に、立ち止まって考えたいことがあります。アメリカの法学者キンバリー・クレンショーが提唱した「インターセクショナルリティ」という考え方があります。

「交差性」と訳される難しい言葉ですが、要するに「人はそれぞれ、生まれた場所・家庭・体・時代によって、スタートラインがまったく違う」ということです。「安心して勉強できる環境があった。」、「毎日食事をとることができた。」、「学校に通うことができた。」——私たちが「当たり前」と思っていたことは、世界のどこかでは決して当たり前ではありません。先日も、多くの罪なき小学生が誤爆されて命を落とすという「当たり前」の対極である「異常」なる悲劇が起きたばかりです。私たちは我らの学び舎が攻撃される可能性は限りなくゼロ%に近い。そう確信できることの幸せの重みを、我々は噛みしめないとはいけません。

ガガの言葉 *If you don't have any shadows, you are not*

*standing in the light.* に戻れば、「影を持っている」ということ

は「光の中にいる」ということ。私たちは苦しみなながらも、光の

中を歩ませてもらっています。日常の何気ない一コマ一コマが、実はかけがえのない光です。

朝早くから夜遅くまで働き、私たちを支えてくれた両親や家族。時に厳しく、時に温かく接して下さった先生方。笑い合いい、励まし合い、時にぶつかり合いながら共に歩んできた友人たち。ひとつひとつの出逢いが、私たちの今を形づくっています。その事実にも、日々感謝する心を持ち続けたいと思います。



さて、中学の「卒業」とはいったい何を意味するのでしょうか。

中高一貫校という特性上、仲間と散り散りになるわけでもなく、中学校の卒業の意味をなかなか実感しにくい部分もあると思います。辞書を調べてみると「卒業」という言葉には、「思想の発展、技術の習得などで、ある段階を完了すること」という意味があるそうです。すなわち、私たちはある段階を完了し、次に進む「門出」の場にいるということだと思います。門出の一文字目の「門」とは、これまでお世話になったこの学び舎の門。その門を、自分の足で踏み出していく——それが卒業なのだ、私は思います。私たちはこれからも三年間、この門の中に物理的には留まるわけですが、内容的にも物理的にも本当の意味での門出とな

る三年後に、胸を張って卒業できるよう、今日からの三年間も大切に歩いていきたいです。

百三期生の皆さん。これから益々、孔子の言うところの「知行楽」を極め、武蔵生として、先生方から、そして世間から、信頼される人間へと共に成長していきましょう。



これまでの、そしてこれから訪れる新たな出逢いを大切に。そのようにして歩いていけば、たとえ影が色濃くなったとしても、より明るい光の中に立っていることが心の支えになっていくと信じています。すなわち、

*If you don't have any shadows, you are not standing in the light.*  
だと信じていきたいと思えます。

最後になりましたが、私たちを育ててくださったすべての方々に、深い感謝の言葉を申し上げます。先生方、本当にありがとうございます。ありがとうございました。保護者の皆さま、長年にわたるご支援に、心より御礼申し上げます。そして、今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。百三期生のさらなる活躍を祈念して、私からの御挨拶とさせていただきます。

令和八年三月十七日 卒業生代表 平田悠仁